

特54

50

館書圖京東

一 二 冊	一 〇 五 號	別 四 架	函	小 說 類	和 書 門
-------------	------------------	-------------	---	-------------	-------------

考考
善法書館傳

第四號

清和齋

善法書館
坊字在



○参考義士銘々傳卷の二

○淺野長矩生害の事(前號の續)

此時上使も右京どの顔と背向て痛はしき有様を見る者絶て涙のみ直お流しに押包み大廣蓋に乗せ参らす折しも上使下總守との傳八郎殿並に武太夫等の各々退出ありて淺野期の取片付け等の田村の家來ども涙ながらお相勤めける時又内匠頭どのの家來衆より亡駭をす請たき由にて罷り越せし人々に片岡源五右衛門磯貝十郎左衛門田中貞四郎大野郡右衛門堀部安兵衛等なり田村右京どのの委細心得たりとて大廣蓋に乗しまゝ内立關よりさし出すを怒然として請取り乗物に揺入れつゝ涙ながら御供するも昨日に變る白張の提灯幾つか燈し連れ忍びやかまは善提所高輪の泉岳寺へ至りて形の如く葬送の式終り淺法號を涼光院殿少府朝散太夫立利大居士と號け奉りたるに家來衆の皆聲を呑み涙を拭きて空しさ位牌の供をさし力あつくは屋敷へ引取し有様の傍で見ると哀れお

りける次第あり

○田村氏並に庄田總州の事

淺野内匠頭を預けりし田村右京大夫の書院の庭上にて切腹と致させしと言ふ事世上一般の評判とありければ淺本家松平陸奥守との聞及られ甚だ武法と存せぬ致し方あり一城の主たる淺野内匠頭座敷の内にて切腹致させべき事勿論あるに畢竟座敷を改めて建直と費用を思ひて家の名を下すを思ひざるの誠に卑劣さ心底なり恠ての本家までの名を汚すといふく不興に思召し遂に義絶に及ばれしとあり此節庄田下總守との上使として趣き給ひしに第一内匠頭どのに向われ文通なりとも苦しからずと仰られ一事越度の由口上り格別文通とありて大法の禁する所なればあり又只是のさちらす右京大夫との切腹の場所を問合されし折り喰へ庭上とすされても例を擧げ古實を述ておし止むべきをいふく其儘に打捨置かれし事返すくも不調法のことともなりしと云ん

○淺野家屋敷引拂ひの事

並に武林唯七の母貞操の事

借も淺野家の諸家中に此度の大變に付き擾動一方からぬ中又武林唯七の母の此事を聞と齊しく暫時く人心も付ざりしが漸々お我に蘇りて唯七と近く招きよけるの餘りお氣をうちたれば酒一ツまゐるべしとて猪口も二ツ三ツ傾け唯七にさし是にて心晴たり明朝の疾より浮屋敷請取の地方より人數さ一越され何角取返べければ今宵早く休む方よろしからんとて子の刻頃には床へ入りたり唯七の母の機嫌よき氣色に少しく安堵し是より奥方を見送り参らせ夜更て小屋又立歸り睡眠も間もなく夜明ければ應て起出て下女を招き何時も早く起き給ふ母上の今朝も限り日開るまでも睡り玉ふの何とやらん心元なし起こしませよと母の臥したる一間へ下女を遣はしけるお何か知らずわつと叫ぶ聲の唯七が胸間を貫くばかりに聞えければ發と驚き何事とぞ唯七立寄る時に下女慌忙しく出

來りてややうの何とぞ知らず伏玉ふ側に血の流れ有る故驚きいと云より唯七扱こそ何とやらん心の怪しかりけると立入り見るに老母の夜中お自害し玉ふと見へて九寸斗の懐劍にて胸元を刺通し朱に染て伏むたり這の夢かとはかり債の唯七狂氣の如くおありなれば隣家の朋友三四人集り唯七を諫めたるやう母上の死を悲み玉ふ事尤もおれ共今朝の事あり兎角する内は上使杯も來り玉ふ可し早々送り出し参らせられよと諫められて唯七人必附き側を見るるも奮置と覺しく巻たる文あり唯七取上げは覺悟有し事よころ迎涙を押し開きて是と讀む其文お曰く
一筆残したるも今日殿様は身の果て思ひも寄らぬ
お事故十方を失ひ驚き入りやい然らば力あきお事と諦めたり
處如何に致しても馴させ玉ふぬ冥土の浮旅
一人にて何程か便りおく死出の山路とやらんに迷はせ
いごとんと風と心付しより迎も老の身存在へんも詮無き
事責めては冥土の浮供しては咄の伽とも成りたりは

んど思ひ詰め斯の成りやい獨りの此手前を捨し事に
之をく只々殿様の幼き時より數年の春秋なれ隨ひ奉
つりし處今更御別の悲さ一ツに身と失ひ二ツの母
もケ様も成りし得れば遺恨合せられし方を見て君の
仇どて何れもは覺悟有可き事あれと猶更手前も限り
てハ母の爲ふハ仇ありと一向方に入る可き事と推量
致し無き事ながら唐土の王凌とか言ふ者の母乃伏し
て義を勤めし例を倣ひて旁々身を捨す此所篤と覺悟
有て仇の事於てハ仮令手前獨り成りとも心を盡し
やさる可くハ殿様の本意母が本意を達しやされハハ
草葉の蔭より何程か悦びや言ふ及ばぬ事ながら
右吳々モ残しあり
一堀部安兵衛どのの内方より借りやハ會我物語三冊紫
の服紗の包み置すハ早々ハ戻しハ禮頼を入ハ小抽登
ッ帶壹筋ハわりん方ハ記念送送り玉はる可くハ能勤
めハ者ゆゑ不便の事と今更の様と思ひあり

一御屋敷引拂ひハ後の源五右衛門方へ參られ此様子篤
と物語り有つて本意を達しハまで朝夕の事世話頼
り様おやさる可くハ元より源五右衛門夫婦の衆
を父共母共思ひて大切に仕へ候ハ専らの事ハ必ず
傍輩中何れも本意を達せんと覺悟の節ハ其下知
小隨ハ仮初も差出て身の譽れを貪り人に疎まき
さぬ様おと覺悟有る可くハ片岡源五右衛門方へ送
り物も札付け包み置し得ハ残りも皆々源五右衛門方へ
送り給る可し別ハ文とも思ひ依りハ得共殊の外最期
を急ぎやハ故之だにも漸々認めやハ萬事ハ推量玉と
る可くハ殘し度事海山も尽し難くハ得共右の通りの
事故に荒々や殘し參らせハ其身本意を達しハ迄賢固
にて如何様にも心を尽しやさる可くハ先ハあら
めて度ハハ
母より
武林唯七どの
斯と讀も終らず又絶え入しと薬杯用ひて呼返し近所の朋

輩立合て形の如く取賄ひ泉岳寺へ送りたり希代の志ざし
解か感するお絶えたり去ればこそ唯七始めより終りまで
心弛まず殊お吉良殿の館へ亂れ入るの時分も其働さ諸士
の上に勝れ上野介を討取りしハ此唯七あり扱も三月十五
日上使淺野内匠守屋敷へ來り玉ひて直ハ小書院の座敷へ
通られられハ戸田采女正殿淺野守殿同じく隼人殿同
じく左兵衛殿侍設て面談あるハ上使上座も着座有て上意
の趣さハ渡さるハやう内匠頭私情の意恨と以て殿中も憚
らず希代の無禮急度仰付らる可き處家筋を思召され長短
義ハ昨日田村右京太夫方まで切腹ハ付け居屋敷赤穂城地
共に召上られハこの事なりと陳られければハ戸田采女正
どの始め上意の趣さ異なり奉つりハハは請相濟たり情上
使内意に家中の諸士混雜致さぬ様ハ心添られ可き由仰
られて座を立せらるハと程無く請取役ハ仰付られし水野
大監物どのハ同勢數百人相詰たり淺野御本家松平安藝守
殿よりも万一家中の異論騒動も有んかど堅固の人数百餘

人差出さるハ一類中曾斯の如くされハ家中の諸士段々
退きこり此時片岡源五右衛門堀部安兵衛磯貝十郎左衛門
杯相談して中々大勢の人数殊に様ハの諸道具車に積み
杯せハ心急ぎて以の外混雜す可しとて内匠頭殿屋敷の裏
手の船着あれハ數十艘の船を用意して一番ハ是れ二番ハ
誰ハ番組を定め悉く其舟ハ積て思ひハ心々ハ勝手の方
へ引拂ひけハ何の騒がしき事もなく最物静ハ引拂ひけ
るを見る人大きハ此才覺をぞ感ハける
○堀部父子武選評判の事
内匠頭殿ハ家來に堀部安兵衛と言へる者あり又彌兵衛ハ
隱居あれ共百石を領し安兵衛ハ百石を領したるハ此度
ハ屋敷召上にあるハつた其跡ハ先水野家の人数受取り
時に安兵衛の居宅ハ至り見るハ大さハ感ずる者有と言ハ
如何とあれハ玄關よりして叮嚀ハ掃除せしハ物家中何れ
も同じ事ながら別ハ此處念入れ扱其内ハ通りて見るハ
座しきの様子ハいかも叮嚀ハ掃清め腰張一枚だも損せ

す客座敷と覺しき拾遺余の間の床ふと符野が筆勢潔能き
松よりの山の掛物をかけまはらしき小松と妙挿たる一
瓶を置けり其手際兎や角ふ言ふ可き様おし扱様廻りより
手水搦へ杯の掃除心と入て水をたへ置き側らみ手拭懸
を置たり其外小座敷納戸杯左も尋常なる事例し無し又蓋
所に至り見るに小鯛式杖と酒壺樽置たり誠武法を守り
し仕方嚴するに絶たり連涙を流さぬ人も早く早々監物と
のへ上しかば仰に曰く然も有ぬ可し彌兵衛の音も聞へ
し名ある侍あり殊又一子安兵衛の馬場にて仇討せ
し功の者なれば斯も有可き事なり之も付ても吉良上野介
嚙々察覺の宜しかるまじき物ありと云ひて堀部彌兵衛同
く安兵衛の事と殊の外み感心ありしとかや借水野大監物
どのは受取有て跡の酒井頼負佐殿へ下し置れたり都ての
家中の思ひくみ引分れたるが藤井又左衛門安井彦右衛
門の戸田采女正殿へ差置る大野郡右衛門の早速發足して
赤穂へこそ歸りたる

○原惣右衛門茅野三平赤穂へ早打の事

扱も三月十四日殿中に於て内匠頭長矩と吉良上野介刃傷
及及びしと言事傳奏浮屋敷へ早速相知れりや否哉相詰
し程の諸家中の上を下へと返し手の舞足の踏處を知らず
取亂せし中より原惣右衛門茅野三平の兩人の誠に伊家の
大體此上か一推量するも勅答の賀日殊に殿中作場所の辨
へも無く刃傷に及び玉ひし事あれば主君内匠頭疵を求め
玉のすとも切腹あるべしされば赤穂へ注進せる事當然
の理あり連原惣右衛門茅野三平の兩人の傳奏屋敷より金
子三百兩を受取り二ツみ譯けて惣右衛門三平共お慰斗目
を著したる儘脱替も及ばす早々小屋へ走り歸り即刻馬
を支度し兩人共上屋敷より乗出し鞭お鎧を合して千里も
一時と乗出るふ元來 兩人共お無双の馬の名人なれば宙
を走るが如く品川よりして是を見る者之の何事の起れる
やと肝を消したり借江戸表より播州赤穂の城まで其道法
百七十余里の處と何卒して三四日の内お乗附んと鞭を打

て道を急ぎ漸く日を重て既よ播州茅野迄乘附し時三平
中様某しの父三郎左衛門此處あり是程の大變を門前を
通りながら其儘も差置難ければ馬を乗寄せ一言入て
走る可し貴殿の乗掛玉のんやと言ふ惣右衛門之と聞て
暇取る事無の上の某しも立寄る可しと原茅野二騎相並で
乗寄せ茅野三郎左衛門が門前近く馳寄りに門の内より死
人を送り出したり三平是を見ると等しく激と驚き色を違
ひ之の何事にやと側傍の家に乗寄せ云々の事を聞ふ三郎
左衛門の女房急病にて相果すされし由答ふるも三平
の爲に天も地も掛替の奇き母あれば聞と等しくさ
しもの茅野も心乱れ物をも言せ愁然たり此時惣右衛門中
けるの斯の如くもて早速にも立をまじ然れば某の先
達て赤穂に至るべし其計の跡より急ぎ歸られよ心底の
程兎角中お言葉なして乗出す三平の暫く門前の家に有
て夫より取て返し我家に入りければ三郎左衛門大に驚き
母の急病を告知らせし事漸々昨日なり然るも何として之

を知り唯今此處まで欠來りけるやと尋ねしかば三平涙を
破落くと流し其義に座の主人内匠頭常月十四日勅答
賀日をも辨せへず殿中に於ての刃傷よく差當り免を
難き事と推量に及びしゆ然れ共主人の相手ある吉良上
野介がの只手負し斗り主人も又何の汚恙が無しと告來り
しを聞や否や兎角の場所宜しからず殊に勅答の賀日あり
は切腹疑ひなしと存じて赤穂の城も急ぎ告んため原惣右
衛門と兩人江戸表と乗出し之まで來りて斯の大變一寸は
知せずぬも如何と存じ原惣右衛門と馬を並べて乗よせ
し向ふも死人を送り出たる有様何事にやと隣家へ立寄
て相尋ねし所急病ふて母人果玉ひしとの物語り三平如何
成る事小や主人の大變に逢ふて心中憂い絶る事あき今
又母の死別を聞くと天の助もあきことかと聲を上げて歎
きしり父三郎左衛門凋れ果て暫く言葉もあかりしが扱
の左様の事有るか誠に人の死別の定まれる事なれば今更
言ふても叶いぬ事なり心底の悲しき左こそと思ひやられ



汗馬ふ策つて
義士急を赤穂
城お告ぐ

て兎や角ふの言葉も無ければ共赤穂へ注進の早打として出馬せし所あれハ早々乗出しては家老大石内藏之助殿杯の差圖を随ひ其後立歸りて母の佛事を供用を可し又惣右衛門との、思ふ處も恥しかる可しと三郎左衛門心強くも諷めしかハ三平力も心も緩み進み出可きやうも無かりしが父の言葉理も當り惣右衛門の思ふ處旁々以て母の死別悲しみを振捨て涙を拂ひ暇と告げ馴める駒を再び立て鞭を加へ乗出す惣右衛門の途に三平が時を移と問あわはり立しかハ百七十余里の處に十四日晝時より乗出して十八日夕七ツ時播州赤穂の城へ乗附たり誠は馬上の達人といふ之をや言可き斯て城中へ入り家中家老中まで入る處大小の諸士を群集せらるゝ内ハ差扣すされハ様と國家老大石内藏助大野九郎兵衛よりや依て原惣右衛門差扣へし間に十八日の初夜過る頃後れて急ぎし彼三平平同じく赤穂へ乗附けたり是と見て赤穂の城内城外とも何となく密々と騒立人々驚怖の思ひありしとある

○再び赤穂注進城内評定の事

此時赤穂城中本丸の大小石内藏助大野九郎兵衛を始めとして奥野將監近藤源四郎小山源五右衛門岡林奎之助岡野金右衛門玉虫伊左衛門吉田忠左衛門毛利小平太大石瀨左衛門矢頭長助岡野三平の兩人罷出で扱も當月十四日の勅使の賀日の内其日の勅答として格式宛も元日の如く甲府宰相の三家の歴々國主城主の大名威儀を正しは登城ある中ハ内匠頭殿左京亮殿兩人も勅使院使は變應の事あれハ未明よりして登城の處に兼て意恨を含まれし事ありや有けん十四日朝五ツ時前勅使院使は登城先殿中松の廊下邊まで内匠頭殿吉良上野介どのと口論に及びて切掛玉ひし處初太刀の烏帽子に流れて二の太刀の装束の石の帯を當りて上野介殿は手紙至て僅かあり之に依ては兩方共何の恙が無く取譯參らせし由之を承知なりや否や早速は屋敷より乗出し注進すいと兩人の口上一様なりけ

とハ一座怒ち目と目を見合せ物言者廻りもあし時に大石内藏助慄く胸を押へて誠お希代の大變あり思召し歸られし事有て刃傷に及べし物あらん然れ共は本意を達し玉はされハ赤心底の憤憤押すり奉るあり昔し右大將頼朝公のは時より喧嘩兩成敗と事ハ五百年來相定り武家の古法にて當時は賞罰共は厳重されハ吟味の上吉良上野介殿は切腹内匠頭との切腹にて更くと相濟べし然らハ赤心も時を本意とすものなり其上まで上野介殿の家も建されハ此方の家も建つべし吉良殿半分減じ給ふもらハは家も半分減じたまふ可し兎角に善悪は兩家一ツにされハ誠を以て是非及ハす名もあさ下々さへ無念あり或ハハ残念あり逆討果し勝負に及ハ事珍らしからず況んや一城の主人として定めて能々の事胸に耐へ難く有ぬれば社打掛たる刃傷におよび給ひ一あらん此上如何様も仰付られハ共君取辱しめらるゝ時の臣死すとか言事あり夫と上を越して君の命日夕にあり某しを始めとして何

程の事ふ仰付らるゝ共更々以て厭ふ可き所請ふし何きも
左様ふ思し召し諦め給ひ重ねての注進を待可し逆何の六
ツケ敷相談も評定もなし列座の諸士之を聞き成程内藏助
殿仰の通り喧嘩兩成敗と定まる事成り是非及ばず主君
涉切腹は相手切腹の上柄の其下たる者共如何様共成勝の
事ありとて中々驚く色もなく内藏助が一言ふて皆々落附
き腹を告て本丸を退きたり扱内藏助の原惣右衛門茅野三
平の兩人に向ひて涉忠義の志ざり兎や角ふ難し殊に
百七十余里の道法を四日半にて乗附け玉ふ事凡人の爲
す業ふ非ず馬上の達人並ふ者有可からず緩々休息成
さる可しと挨拶せしかば原茅野兩人共賞美に預り却て
恥かしく存じひとて是より本丸と下りける何れも同様明
れバ三月十九日朝五ツ時赤穂の城お馬を打て乗込む者お
り程お城内にて馬より下なる是のこれ十五日の朝江戸
表を出立せし者あり衣服寸断に切れ馬共汗は浸り
て息切あへず馳來るゝ則ち片岡源五右衛門あり城内の諸

士此口上にて大體様子相知れやべしと我先本丸へ相詰
めける處先立て内藏助九郎兵衛空之助將監源四郎源五
右衛門等登城をきて相待たり惣右衛門三平も相詰め大
小の家來皆く相詰る時片岡源五右衛門やたるゝは主
君内匠頭は事は場所とも顧みず殊に天位を恐れざるとの
涉立腹強くして十五日四ツ時田村右京太夫殿へ涉預け吉
良上野介殿の場所と辨まへ打合すさす神妙の至り遣り
高家の見識あり逆涉成に思し召す旨上意有ては醫師まで
仰付られ首尾残る處お屋敷へ歸り玉ふ跡お大目付
庄司下總守殿は目付多門傳八郎殿上使として田村右京太
夫殿は屋敷へ至り玉ひ上意の趣き涉場所の辨へさく天位
を輕んじたる致方希代お思し召し急度仰付けらるべき處
先祖輝正小彌が武功今程も思し召忘れ玉ふす依て切腹仰
付られ赤穂城地召上られるゝとの事にて十四日酉の刻
田村の館に於ては生害有り酉の刻過ぎ某し始め大野群
右衛門磯貝十郎左衛門田中貞四郎杯田村氏の館お迎ひ君

の亡體と受けは菩提所泉岳寺へ形の如く送り奉つりて
罷歸り其夜中奥方の式部少輔様は方へ引取せ給ひ上中下
の屋敷の十五日十六日の内に急度明退く可いとの上意
あて請取役水野大監物殿仰付られ夜中は人数詰寄せやひ
之お依て先々源五右衛門注進に及ぶものなりとの口上を
聞より座中發と仰天し故の如何に何事ぞ喧嘩兩成敗とて
定めらるゝ處あるお内匠頭は限り切腹仰付られ上野介殿
の其儘差置を刺さへ赤穂の城地共お召上らるゝとの誠よ
片手打の政道更に其意を得ずと一人お出づるや否哉五
人拾人座中忽ち騒立ち遣り何と致たる事おやと怒れる面
涙を流す此時小山源五右衛門近藤源四郎奥野將監の三
人の無双の勇士にて五万石の家中に鬼神と評判せられし
程の者ありしかば座中を暇と白眼て内藏助殿九郎兵衛殿
杯の何と思し召しや源五右衛門口上の趣きは聞かされし
通りあり評定も談合も入るまじ態と公儀より赤穂の者共
お城受取の者に向て弓を引さ矢を放し一と軍をせよとは

差圖なるも同様の事あり假令天子の勅命おもせよ主君の
亡跡よて阿容く一城を人手お渡す可きいれおし百
万の強兵を以て取圍む共二三度追崩して冥途泉下にて此
超きを亡君お物語りや上可し弓矢八幡も照覽われ決し
て二言おしと踊り上り牙を噛み拳を握る有様天晴希代の
忠臣義勇の侍ひと列座の諸士之を感じける中おも若年の
面々勇ましくや思ひけん川村傳兵衛毛利小平太大石源左
衛門茅野三平岡島十八右衛門岡林奎之助伊藤七郎右衛門
杯の誠に小山近藤の仰の如くあり争で主人切腹の跡にて
一城を阿容く渡し可きや力の屈かん程戦ひ討死す
べしとて大音お響りける程に大石内藏助座中に向て何れ
ものおさるゝ處尤もの事よて一理おさるゝ非す元より主君
亡び玉ひて跡の城を手を束ねて渡す事某しを始め同心せ
ず然れ共内藏助退いて愚案を巡らせに事を破り一同に閉
籠り命を捨玉ひん事何の何時にても心安く去ればこそ
古人の言葉も死の一旦にして安く生れ萬代おして堅し

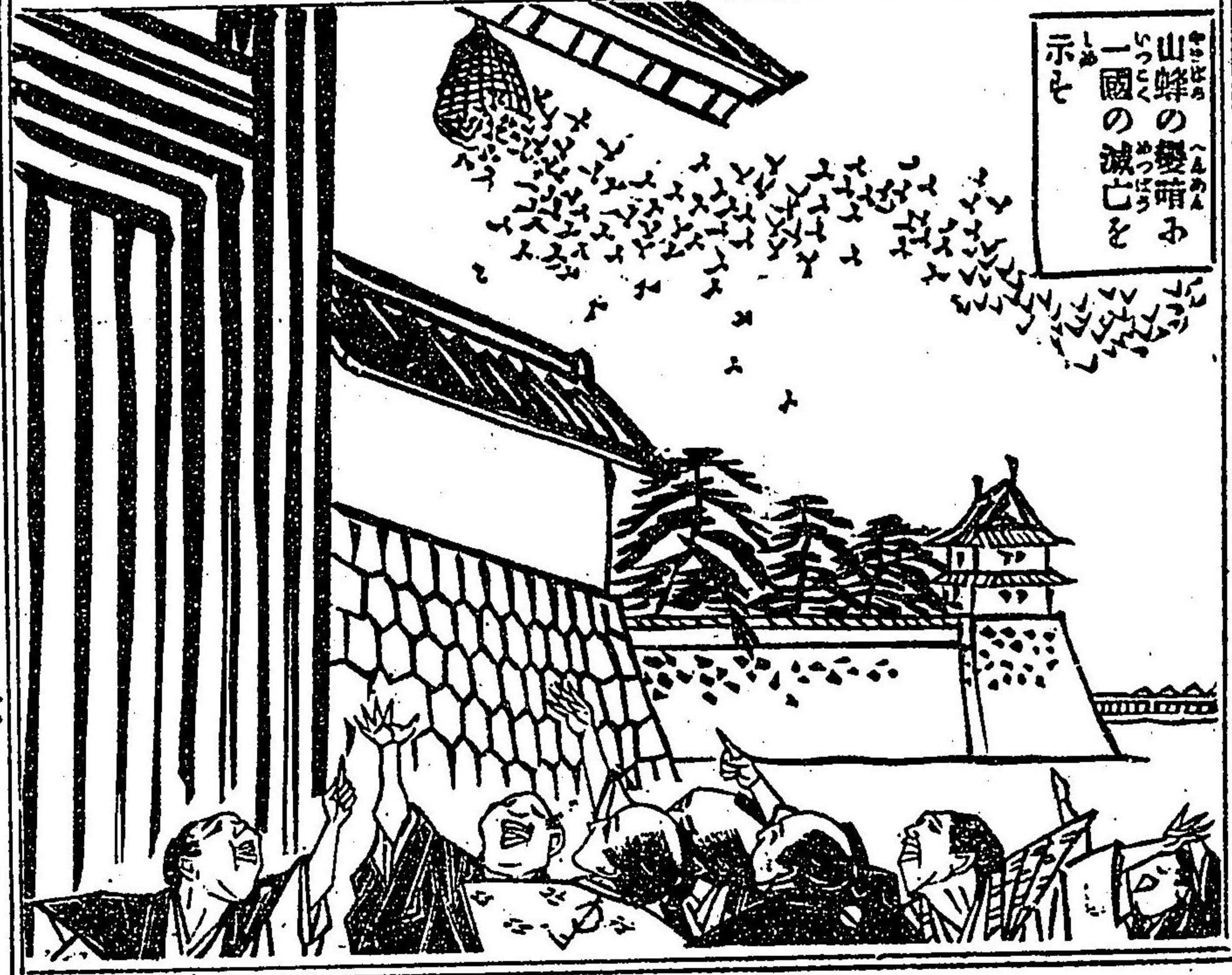
と承知の然れば法に随つて幾度も江戸表へ参上し立
 て可し内匠頭家筋の事尤も嫡子無ければ弟大學罷り在
 り候得ば彼れを以て相違なく跡式仰付られ下され一家共
 安堵致し度と再應は願ひ申上げ其上は赦し無くんば如何
 にも必死と籠城一と軍し城を枕し討死すべし此事如何思
 召し候や一大事の相談善悪ともに腹藏なく仰聞らるべ
 しと申出だしたる時小山近藤等不得心の氣色にて中々
 用る様子ありし時に九郎兵衛進み出て扱もく内藏助殿の
 涉了簡の程誠に忠臣のする處と感心するに絶たり左様お
 社有まはしけれ早々思召し立ち玉ふ可しと言ふ吉田忠左
 衛門原惣右衛門岡野金右衛門を始めとて片岡源五右衛
 門矢頭長助杯皆々了簡甚だ理に當りて存じし一刻も早
 く進しかば小山近藤奥野川村岡林玉出杯皆々泣くし
 ながら同心の氣色あり内藏助大に悦び此座中よりして
 離る此度の使ひを望んで出る者むらば無双の忠節たる
 べしと言ひも終らぬ内に内匠頭持筒頭相動し月岡治

右衛門多門九左衛門の兩人進み出て某し兩人は使ひ役相
 勤をいべしと望ければ内藏助大い感じて誠に志ざし
 の程感するに絶たり然らば亡君の目通りよては願ひの趣
 き申入たしと申ければ皆く同心して内藏助と先に立て
 本丸金の間み至り上段より片岡源五右衛門持筒したる内匠
 頭殿立理大居士の位牌を扇を開きて其上に差置さば目
 見の席に随つて願ひ致すべしと上段の簾半ば巻上げは目
 見に及びけるが誠に正面に君在す如く内藏助上段より
 平伏して申上げるやう此度は不慮の事にては家の危き
 事風に向ふ燈火の如く之を依て内藏助同役共惣家相
 斗ひては家相續の義關東へは願ひ申上げ尤も此度の使
 相勤むるに多門九左衛門岡野金右衛門の兩人偏には奉公
 出情の段感心仕定て亡君尊靈にも左様思召は満足遊
 ばされいんと恐きながら推量奉つりいと申上げて願て
 内藏助祐筆を召寄られ願書の文言と望みて段々と相認む
 るうち多門月岡の兩人に旅の用意致しされし様ふと

の事よて暫し暇と賜ひける

○多門月岡江戸下向の事

程よく願書相認め終しかば多門月岡の兩人の旅の用意を
 整へ早速本丸に至る内藏助申けるの早々は下りたりて願
 書と用指は老中方へ差上すべく併ながら万一赤穂城受
 取の涉方最早江戸表を出立成されいとの事あらば早々乗
 戻し玉ふべしは出立後に於くの中々幾度願ひ申上げ逆
 も及ばぬ事あり兎角涉立出以前と申事ならば早々は老中
 へ差上げ幾度にも願ひ申上げし戸田采女正様は事の
 涉徒弟の事されば藤井又左衛門安井彦右衛門兩人共に采
 女正様方に引取罷り在る可けれ共是杯に面談の無用の事
 ありは立寄り成されし事不通く及ずい申遣も之なくし
 へ共は家の存亡の此は使ひして事相定りし間左様思召
 し成されべくとて扱願書を相渡しければ委細長まり入し
 よしにて兩人の直ぐ乗出しける此跡にて一座の家の中へ
 向つて多門月岡の兩人は聞の如く願書差上げたれば善悪



共に罷り歸りや送らば城内如何にも萬事取欽め穩かに
て相待べしとや含め其後本丸を皆く退きたり爰に不思
議の事あり三月十四日に赤穂の城東門の梁の軒下の大さ
ある蜂の巢出来たり夫より以前有しと十四日の朝小成
りて見附しやと言人有り共都て赤穂の城の家老内藏助
殿しくや付て毎朝番士始め巡廻に悉く念を入れ垢の付
く處を洗ひ或はふき蜘蛛と巢を懸しを見て早々に拂ひ
杯して叮嚀なる事仮令を取物無し依て光り輝きけり然
れば万人の目よ立つ蜂の巢杯棄より有べき事に非ず時に
此蜂の巢の邊山蜂登つ飛來りし處に小蜂出て散々一ひ
食間がれ巢の内へ入るよと見へしが程かく數千の小蜂群
れ出て彼の山蜂の四面を囲み難なく喰殺し大橋の上を落
したり之の不思議とは城下の町人大勢寄て見物すは番處
あても何事やと走り寄り遙か高死處なれば長竿を取寄る
なんと、原取處小蜂の山蜂を殺し巢の内へ入たり兎角
する内西の方より山蜂三四十群り來りて小蜂の巢の内へ

乱れ入るや否や數千の小蜂も耐之難く見之飛出るを山蜂
物の數共せず取包んで喰合ふ有様恰も隙を分て勇士の勝
負を争ふが如く四方より別れ又一つ成り東へ走り西へ趣
き南へ向ひ出て進み退く事如何様四五度よして山蜂一ツ
に小蜂三ツも四ツも喰殺しければ一時計に數千の小蜂の
残り少く喰殺されて北を指て飛さりける彼の山蜂の巢
の内へ飛入て如何しけん悉く巢を食破りしかばさしも大
き成蜂の巢未だに碎け大橋の上へ小蜂と共々落たり之を
見る人手を打て腹を消し時山蜂東の方へ集りて聲を上
しが正敷軍の勝鬨を上る如し斯て其蜂段々と飛去りける
の希代の事よと不思議に思ふ者數知れず大石内藏助之を
聞て門高くして人の手も及ばぬ軒の下ありとて蜂の巢を
喰ふまじきも非ず山蜂と小蜂との能時も有べし又中
の悪くなりて喰合ふ間敷物も非ず彼平相國入道殿世の
末に成て馬の尾鼠の巢と一夜の中に喰て子を生せし杯
と同日の論も非ずと言つるが心中の内匠殿平日差

詰たる御了簡にて至て短氣お在しかば露程の事も誠にも身
の大事と覺し召之の家を過種杯と思ひ究め玉ふ御氣性な
れば万一此度の御馳走役に付て誤り給ふ事もや有と心苦
敷く胸を痛めけるが莫遮江戸へ人を馳下せべ程の事よ
も非ず且何とやらん一家中の思ふ處も如何と事を延ける
内に十八日十九日兩度の早打注進にて十四日殿中の刃傷
と聞て扱社蜂の戦ひ誠にも其前表ありと思ひ當しとかや又
兩度の早打を見て如何様なる大變も有んかと内々取く者
も多かりしとなり

○台命お依て脇坂木下城受取の事

斯て三月十四日早々に評定相濟み田村右京太夫殿御館よ
て内匠頭どの御生害お及び御屋敷三ヶ所十五日十六日の
内に上意有て戸田采女正殿淺野源藏守殿同じく準人殿同
じく左兵衛殿上使の御請有つて水野大監物殿御人敷を進
め御館を請とらき奥方の淺野式部少輔殿方へ引取り家中
の思ひくみ立別れたり藤井又左衛門安井彦右衛門の兩

人の戸田采女正殿も未だ罷在り之の赤穂の城請取り渡し
相濟むまでとの思召しおて留置れしあり然るに殿中御評
定極り三月十七日御老中より内意おて脇坂木下の兩家へ
赤穂城受取の事仰付られければ兼て御用意有る時三月
十八日脇坂淡路守殿木下肥後守殿兩人を召出さきて將軍
家上意の趣お御老中小笠原佐渡守殿仰渡されけるやう淺
野内匠頭の居城播州赤穂の城受取すべし尤も甲兵の人数
を勤め方一城内の者共心得違致して籠城に及び弓を引に
於ての四力より追取こめ忽ちも乗取すべき事勿論あり右
の用意を致し不日に立出お及ふべしとの事あり脇坂木下
の兩人委細長まり奉つりいと御請相濟て後御座の間に召
出さき銀子御羽織並お御時服等取揃へて下し玉ふにぞ有
難き趣お再三仰上られて兩人共退出り同日荒木重左衛
門榎原采女御代官石原新左衛門三人と召寄せられ上意の
趣お仰せ渡さされければ三人畏まり奉つりいと御受あり何
れも御時服下し置れ之と拜領有て殿中を退出す尤も大切

の城受取なれば御人數の勿論武具兵具の御用意あり脇坂
木下の兩家小での上を下へと返し滅ぶ珍敷事共なり又
上使荒木重左衛門柳原采女石原新左衛門右三人共に用意
早速整ひたる頃元祿十四年の三月廿二日城受取の兩家
御出立つ仲仙道より登り有しかば其騒動大方あらぬ事と
も有り也

○赤穂近國の諸侯台命を蒙る事

扱其後江戸表にての様々評定あり淺野内匠頭若年の
時より下を憐み民を撫育する事恰も赤子と母の愛する如
く依て五万石の者共内匠頭の爲の命を捨ん事塵よりも
輕しと思ふ者十ハ八ツ九ツあり殊更國家老老石内藏助と
言ふ者の傳へ聞く大職冠鎌足公の後胤にして武家に降
りて近江國大石の城主として代々武勇の名高かりける
が内藏助が先祖大石頼母が時に至りて浪人の跡とあり其
子大石將監の慶長年中一度の軍功あり文祿年中朝鮮
追討の時も別して天下の人の目と驚かせしが中よつて

慶長五年七月攝州伏見の御城を備前中納言兩旗を以て攻
させ玉人時城代彦右衛門内藤彌治右衛門松平五左衛門同
く主母頭等粉骨を齎して挑み戦ひ寄手の勝利あり一處
大石將監自身の働も勿論朋友の手の者共皆で悉皆く軍功
を顯し程もかく關ヶ原の一戦も西方敗軍の後大石の浪人
の事故本國江州より引籠りける然るに數度の軍功を淺野家
の耳に入て内匠頭の先祖長重召出し千五百石を宛へ玉ふ
則ち采女正殿の老臣となりて万事と司どり尤も代々忠
節ある其孫の嫡孫大石頼母長重の采女正殿は妹を下し五
ひて妻とす此故も養子と雖も當時の内藏助の内匠頭殿の
爲に從弟あり老臣あり殊に若年の砌りより一軍學も心
を盡し和漢の兵道より達し下を撫て上を尊みいよしあり

明治十五年五月廿七日に届七月十日出版

編輯兼出版人 日本橋區品川町五番地 (定價壹部四錢)
東京府平民 山田伊之助
發賣元 全區室町三丁目九番地 滑 積 堂
大賣捌 芝區宮本町一番地 平野傳吉